



Title	発話キャラクタは異なる言語間で変わりえるか：日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から
Author(s)	山元, 淑乃
Citation	琉球大学国際教育センター紀要(2): 18-38
Issue Date	2018-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41067">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41067</a>
Rights	

## 発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか 日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から

山元 淑乃

### 要 旨

本研究は、一人の話し手が示す発話キャラクターが、異なる言語間で変わりえるかどうか、また変わる場合にはどのように変わるのかについて、探索的に解明することを目的とする。そのため、ある日本人英語学習者Aによる日本語と英語の講演の動画を使用し、その発話キャラクターの変化について、日本語でのAを知る12名を研究参加者として、フォーカスグループを実施した。フォーカスグループのデータの質的分析の結果、Aの日本語と英語の間の発話キャラクターの変化は、研究参加者によってその捉え方が異なる微妙なものであったが、全員がAの何らかの発話キャラクターの変化を感じていたことが明らかになった。本フォーカスグループの参加者の大半にとって、Aは、日本語では説得性の高さを重視して聞き手に強く訴えかける『威厳のある熱い教育者』キャラであり、英語では了解性の高さを重視して聞き手に寄り添う『親しみやすくユーモアのある対話者』キャラであった。なお、この英語のキャラクターは、A自身が意図的に表現しようとしているという『温厚かつ重厚でユーモアのある紳士』キャラと、ある程度重なっており、Aは自らが意図するキャラクターの獲得に、ほぼ成功していることも示された。

【キーワード】 発話キャラクター, キャラ変わり, フォーカスグループ, SCAT, 英語習得

### 1. 本研究の背景と目的

人は、状況に応じて様々な人物像を、意図的または無意図的に表現している。その人物像は、実際は状況に応じて変わっているが、社会的には「変わらないこと」が期待されている。このような人物像は、若者を中心に一般的に「キャラ」と呼ばれており、定延 (2011) によって「キャラクター」と定義されて以来、主に言語学の分野で、キャラクターが表現される言葉や身振りなどについて、研究が進んでいる (山口, 2011, 金田, 2011 など)。

第二言語を学習して流暢に話せるようになると、学習者もその言葉で様々な人物

像を表現するようになる。大人しく控えめな日本人が、英語を話し始めた途端に、積極的に強引なキャラになるというような「キャラ変わり」を目にしたことがある人は、少なくないのではないだろうか。また、インターネット上には、言葉に連動してキャラが変わると述べている記事が数多くみられ、筆者自身も英語やフランス語を話す時に同様の感覚を感じている。また筆者は、海外での日本語教師としての経験から、日本語学習者とその母語や日本語で表す人物像が、日本への留学を通して変わることが頻繁にみられると感じていた。中には、まるで別の人物になったかのような変化をみせた者もあり、筆者は時にはその変化に違和感を抱いていた。

学習者が第二言語で表現するキャラクタは、例えば、第一言語では丁寧な人物が第二言語では高姿勢な印象を与えるというように、第一言語と異なるものもあれば、同様な印象のものもある。では、このような、言語間で異なる（または同様の）キャラクタは、第二言語学習者本人やその周囲の人々によって、どのように認識されているのだろうか。また、そのようなキャラクタはどのような背景で、どのようにして獲得されるのだろうか。筆者はこの問いをリサーチクエストンとして、異なる言語間でキャラクタが変わる（または変わらない）と判断された言語学習者を研究参加者として、インタビューを実施し、そのインタビューデータを質的に分析し、そのキャラクタが獲得された過程と背景を探索的に解明しようとしてきた。そして、その研究の遂行にあたって、各研究参加者のキャラクタをある程度同定することが必要であった。しかし、ある人のある状態のキャラクタは、数値や量を用いて「〇〇キャラが△△%」というように同定できるものではない。キャラクタが変わる／変わらないと感じる感覚は、個人的で漠然とした微妙な感覚であり、その感じ方は聞き手によって千差万別であるとさえいえる。とはいえ、研究参加者のキャラクタが、筆者一人によってその印象から「〇〇キャラとでも呼ぼう」と漠然と同定されただけでは、読者に対する説得性が低く、研究の前提としては不十分であると考えられる。しかしながら、研究参加者の音声を、不特定多数の人に聞かせて調査することは、本人が特定されやすくなるため、研究倫理の点から問題がある。従って、筆者は通常、研究参加者を知る周囲の信頼できる複数名の発言を、研究倫理に配慮した上で、分析のデータとして取り入れている。また、研究参加者によっては、音響分析によりピッチの高低を明らかにしたり、筆者と一定のラポールのある複数の音声学者に音声を聞いてもらい、その印象を述べてもらったりした。

本研究の研究参加者である英語学習者Aは、日本語と英語で特徴的な発話キャラクタを示す。筆者は、英語を話すAと日本語を話すAの間に、キャラクタの変化を感じていた。筆者が感じたこのAの変化が、筆者の日ごろの研究からもたらされた先入観によるものか、それとも他者にとっても同様に感じられるものかを、調査する必要があった。そして、Aにそれについての倫理的な確認を行った際、Aの方か

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

ら、自分が教員として担当している大学院のゼミに参加し、その参加者にきいてみてはどうかと、提案を受けた。これは、研究対象となる研究参加者についての情報取得のためのフォーカスグループが実施できる、非常に稀な機会であると判断された。本研究は、このような背景と経緯によって実施が可能になったフォーカスグループを利用して、一人の話し手の発話キャラクターが言語間で変わりえるかどうかを明らかにし、変わる場合にはどのように変わるのかを、探索的に解明することを目的としている。

## 2. 研究方法

### 2.1. フォーカスグループ

フォーカスグループは、質的データの採取方法の一つで、ある焦点化されたテーマに対して、経験や背景などが類似した者が集まったグループによるディスカッションを通して、課題に対するコンセンサスを導き出すことではなく、多様な見解を生み出し、共通性を持つ者同士の相乗効果によってディスカッションを展開させ、より深みのあるデータを得ることを、目的としている。しかし一方で、参加者は他の参加者を認識できるため、参加者同士の匿名性は保証されず、倫理的な問題が生じる可能性もある。従って、フォーカスグループを実施するときには、「グループメンバーは討論の守秘性を保持することを念頭におかなければいけない」(ホロウェイ&ウィーラー, 1996/2000)。本調査は、普段の研究参加者を知っており、研究参加者とある一定のラポールが形成されている者が集まるだけでなく、全員が質的研究や研究倫理をある程度理解しており、守秘性も保持されるという、貴重な機会であった。さらに、Aは本研究にとってきわめて都合の良いことに、ほぼ同じ内容の講演を日本語と英語で行っており、その動画をフォーカスグループに利用することができる。このような好条件が整ったことにより、日本語と英語でのAの発話キャラクターを同定するために、フォーカスグループによる調査が可能となった。

フォーカスグループは201X年7月に実施し、調査に要した総時間は1時間36分であった。冒頭で筆者が研究の説明を行い、参加者全員から書面による同意を得た。そして、参加者の属性と、簡単な質問に答えるアンケート用紙を配布し、その質問に答えながら、Aの日本語による講演(約15分)と英語による日本語とほぼ同じ内容の講演の動画(19分)を視聴してもらった。その後、Aの話し方から得た印象について感じたことを、全員で議論した。Aは調査のイントロダクションには同席したが、自分について誰がどの発話をしたかは筆者から聞くことはないのでこの研究のために自由に発話するようにと依頼し、議論に入る時点から席を外した。

## 2.2. 研究参加者Aの属性とその英語運用能力

研究参加者は60代の大学教授、Aである。Aは日本で生まれ育った、日本語を母語とする英語学習者であるが、言語や第二言語教育などに関する領域を専門とする研究者ではない。Aは国内外での英語による複数の国際会議で座長を務めたり、アメリカの複数の大学の連続的なインタビュー調査を英語で行ったり、外国の大学や政府機関に招聘されて英語でセミナーやワークショップを実施したり、外国の文化機関から日本の教育についての講演依頼を受けて英語で実施したりしている実績がある。Aは就職後に、招聘研究者として、30歳代後半と50歳代前半の各1年、延べ2年間英語圏の大学に滞在したことがあるが、それまでは留学経験がなく、それでいて高度な英語運用能力を習得した。Aの英語力を評価するエビデンスは複数存在するが、その一例として、Aが英国で行った講演の聴衆であった、BBC (British Broadcasting Corporation) に勤務する日本人記者から送られたコメントを以下に引用する。

*A先生のご講演は、内容も英語も話術も素晴らしく、学ぶところがとても多かったです。質疑応答でも指摘がありましたが、先生のご講演は論理が極めて明確で、とても分かりやすかったのが印象的でした。A先生のご経歴を拝見すると、特に留学経験が豊富というわけではないので、やはり音楽を嗜まれる方は優れた音感が語学にも活かされるという好例だと思いました。*

この引用の「質疑応答でも指摘がありましたが」というのは、聴衆の中の英国人による指摘である。このように英国在住の日本人だけでなく、英国人からも講演が評価される点でも、Aの英語運用能力は一定に高いとあってよいと考えられる。

## 2.3. フォーカスグループの参加者

フォーカスグループには、以下の(1) - (3)の3つの共通性を有する11名に加え、Aの呼びかけに応じて、(1)の共通性を有さないが(2)と(3)の共通性を有する者も1名参加した。参加者の属性は表のとおりである。

- (1) Aが担当する大学院のゼミに参加している質的研究の実践者または実践を志す者
- (2) 普段の、日本語を話すAをよく知る者
- (3) Aと一定のラポールが形成されている者

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

表1 フォーカスグループ参加者の属性と言語能力、動画内容の理解度

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
年齢	36	37	56	29	64	54	39	26	48	25	23	36
性別	M	M	F	F	F	M	F	F	F	F	M	M
第一言語	日本語	日本語	日本語	中国語 英語	日本語	日本語	モンゴ ル語	日本語	日本語	モンゴ ル語	日本語	日本語
①	5	5	5	3	5	5	3	5	5	3	5	5
②	2	3	3	5	1	3	2	3	2	3	3	1
③	5	6	5	5	6	5	5	6	6	5	6	5
④	3	2	5	4	2	2	6	6	5	5	3	3

① 日本語の聴解能力

(1: 挨拶や簡単なフレーズが理解できる, 2: 日常会話レベルなら理解できる, 3: 話題によっては専門的な内容も理解できる, 4: ほぼネイティブスピーカー並に理解できる, 5: ネイティブスピーカーである)

② 英語の聴解能力

(1: 挨拶や簡単なフレーズが理解できる, 2: 日常会話レベルなら理解できる, 3: 話題によっては専門的な内容も理解できる, 4: ほぼネイティブスピーカー並に理解できる, 5: ネイティブスピーカーである)

③ 日本語の動画の内容の理解度

(1: 全く理解できなかった, 2: あまり理解できなかった, 3: 少し理解出来た, 4: ある程度理解できた, 5: ほぼ理解できた, 6: 全て理解できた)

④ 英語の動画の内容の理解度

(1: 全く理解できなかった, 2: あまり理解できなかった, 3: 少し理解出来た, 4: ある程度理解できた, 5: ほぼ理解できた, 6: 全て理解できた)

参加者は全員、通常はAと日本語で接しているが、外国での国際学会にAと一緒に参加したなどの経験から、英語を話すAを見たことがある、またはAと英語で話したことがあるという者が3名いた。本調査に使用した英国での講演をその場で聞いたものも2名いた。

## 2.4 倫理的配慮とデータ採取

研究参加にあたっては、Aとフォーカスグループの全ての研究参加者に対して、書面と口頭で研究の趣旨と研究者の守秘義務に関する説明を行い、書面による同意を得た。フォーカスグループの場では研究参加者に少しでもリラックスしてもらえよう、茶菓を用意し、和やかな雰囲気を実施するよう心がけた。

A自身に関するデータ採取は、対面のインタビューではなく、筆者とインタビューがインターネット上にワークシートを共有し、両者がそのワークシート上に質問と応答を書き込む形式で行い、その内容を分析データとした。このようなデータ採取の形式を取った理由は、筆者とインタビューの間にはすでに研究上の信頼関係が構築されていることと、インタビューが自己について省察してそれを言語化することに慣れていたことである。口頭ではなくテキストの交換により行うインタビューには、音声データの逐語記録化の時間と労力が不要になる以外に、インタビューが一定に推敲した結果が回答として得られるため、すでにインタビューによるかなり深い言語化がなされているという特長がある。また、研究参加者が、インタビューに答えて、関連するメールの内容などをコピー&ペーストすることができるため、短時間で情報量の多い、また証拠に基づくやりとりが可能になるという利点もある。

Aとのインターネット上でのインタビューは201X年12月に開始し、質問と返答を少しずつ書き進め、翌年5月に終了し、その後は、データを分析しながら、適宜フォローアップインタビューを行った。またこのインタビューデータ以外にも、Aの発話に関する他者からのコメント、メール文書、手紙等のテキストデータについて、研究倫理を十分に考慮しながら提供を依頼し、分析の対象としている。なお、筆者とAのやり取りはテキストであるため、以降の引用はAの書いたものをそのまま採用している。

フォーカスグループでのディスカッションの内容は全て録音し、筆者がトランスクリプトを作成し、それを分析データとした。トランスクリプトでは、発言者が特定されないよう、参加者は全員Pとした。ただし、同じ発言者の発言であることがわかるよう「P番号」のように発言者番号を付したが、匿名性を保持するために表1とは無関係な番号を付している。トランスクリプト作成における表記のルールは

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

表2のとおりであるが、本稿では、発話内容の分析を重視するため、発話形式の詳細な検討は行っていない。また、相づちや繰り返しなども、トランスクリプト作成時には可能な限り文字化した。また、ストーリーとしての読みやすさを考慮し、対話の進行に関与しないと判断されたものについては、本稿の本文においては省略している。また、研究参加者の匿名性を高めるため、出来る限り内容を変えないよう最大限に配慮した上で、変更を加えた箇所がある。

**表2 トランスクリプト作成のための表記ルール**

〈 〉	聞き手の相づちや短い発言	?	上昇調イントネーションで終わる疑問文の文末
(秒数)	5秒以上の音の途絶え・沈黙	(笑)	笑い声
...	音の途絶え (...1つで約1秒)	( )	不明瞭な箇所に対する筆者による補足
~	直前の音の引き伸ばし		

本文中の [斜体] は語りの部分的引用を表し、「アルファベット:」で始まる斜体の段落は語りのまとまった引用を表す。引用の段落内における行間は、その対話が継続していないことを表す。

## 2.5 データ分析方法

データの質的分析には SCAT (Steps for Coding and Theorization) (大谷, 2008, 2011) を用いた。SCAT は「一つだけのケースのデータやアンケートの自由記述欄などの、比較的小規模の質的データの分析にも有効である。また、明示的で定式的な手続きを有するため、初学者にも着手しやすい。(大谷, 2008)」とされ、少数のインタビューの語りを深く追究するような小規模のデータについて、データ中の潜在的な意味の概念化によって深い解析を得るのに有効な手法である。

SCAT は、「マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、<1>データの中の着目すべき語句、<2>それを言いかえるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念、の順にコードを考へて付していく 4 ステップのコーディングと、<4> のテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。(大谷, 2011, p.155)」ストーリー・ラインとは、「データに記述されている出来事の繊細する意味や意義を、主に<4>に記述したテーマを紡ぎ合わせて書き表したもの(大谷, 2008, p.32)」であり、ストーリー・ラインから重要な部分を抜き出して、理論を記述する。



また、SCAT は多様な分野、特に医療研究の分野で多く使用されているが、近年は日本語教育研究にも多く用いられ（加藤, 2014, 古屋・金・武, 2015, 山内, 2017 など）、幅広いテーマに渡って活用されている。

### 3. 先行研究

同一の言語で一人の人間が示す言葉の多様性について、モクタリ&キャンベル (2010) は、ある一人の話し手が様々な相手に対して発した 30 個の音声を使って行った実験結果を報告している。それによると、被験者たちは、30 個の音声が同一人物によって発せられたものであるとは知らず、音声を話し手別に分類し、それぞれのグループに年齢層や外見などの異なる人物像を提示し、最後に全てが同一人物の声であったことを知り、大変驚いた様子であったという。定延 (2011, p.194) はこの研究を引用し、「これらの結果が示しているのは、「一人の話し手が相手に応じて発するしゃべり方のバリエーションが、被験者たちの想像をはるかに超えていた」ということである。逆の言い方をすれば、被験者たちは、「話し手は相手に応じてしゃべり方をさまざまに変える」ということぐらいはおそらく承知していたとしても、そのバラエティを現実よりもはるかに低く見積もってしまっていたということになる。」と述べている。さらに、Campbell and Mokhtari (2003) の、ある日本人女性の数年間にわたる日常会話データの調査には、話し手の声の調子が、たとえば娘相手には高い声でしゃべり、夫相手だと硬い声でしゃべるというように、相手が家族の中でも誰であるかによって大きく違っていたという報告がある（定延, 2011, p.196 における引用）。これらの研究から、人間（少なくとも日本人）は、同じ言語を話している間も、状況に合わせて、我々が予想する以上に多くの、様々な自己を、言葉や行動によって表現しているということがわかる。

そうであれば、言語が変わることで、さらにその変化が顕著になることが予想される。たとえば Pavlenko (2006) による 1039 名のバイリンガル話者を対象にしたアンケート調査によると、65%の回答者が、複数の言語に連動して複数の自己が存在すると感じていたとされている。このように、言語によって「人格」が変わると感じる複言語話者に関する実証主義的研究は、少なからず存在する（Ervin-Tripp, 1964, Koven, 2007 など）。

南 (2000) は、アメリカからの帰国子女「昌子」が示す、日本語と英語における「人格」「性格」の変化について、「使用する言語に応じて行動パターンが変化するという現象は、文化ごとに規定され期待されている行動パターンが存在し、それが言語を媒介として獲得され遂行される」と考察している。このような静的な「文化」や「言語」という枠組みから、言語間で変わる自己を捉えようとする研究に対して、

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

中山 (2016) は、「大文字の「文化」や「言語」によって表現できる感情や、その表現方法が異なっていることが、言語によって「自分」に対する感覚が異なることの理由だとしたら、感覚が変わらない人がいるのはなぜかが説明できない」(p.17)と述べ、「ある言葉を話す自分に対する感覚や感情はどのようにして生じるのか」というリサーチクエスションに対し、5人の韓国人留学生のライフストーリーから、「文化的資本」「ネットワーク」「投資」という概念を用い、それぞれの留学生の「自分らしさ」が(再)構築されていく様子を分析している。

中山 (2016) をはじめとする、社会的構成主義の影響を受けた、変わる「自己」についての多くのライフストーリー研究では、社会的な「権力」や「政治」が大きな要因となっている。それに対して、研究参加者一人一人のより奥深いところに存在する、個人的な経験を中心としたライフストーリーから、第二言語学習者によるキャラクターの獲得過程と背景を探索的に解明した質的研究に、山元 (2013, 2017) がある。しかしながら、一人の人が異なる言語において示すキャラクターの変化について、周囲の人が感じる印象から調査を行った研究は、管見の限りない。

#### 4. Aの語りの分析からみるその発話キャラクター

本章では、まずA自身の語りから、Aの英語での発話キャラクターについて検討する。Aの話す英語は、丁寧で思慮深い人物像を醸し出しており、それが、日本語とは少し異なる印象を与えていると、筆者は感じた。Aは米国の某州立大学の副総長(当時は教育学部長)から、Aの研究業績等について十分に情報を持っていない時点で、その大学の教員になる気はないかと打診を受けて驚いたこともあるが、その背景には、研究業績だけではなく、英語でのこのような人物像が与えた印象が大きかったのではないかと、Aは振り返っている。また、Aは英語圏の大学での研究中でも、周囲の英語話者と良好な人間関係を築き、快適なネットワークを形成しているが、そのことにもAの英語でのキャラクターが貢献していると考えられる。

Aは英語を話す際、誰に対しても「できるだけきちんとした英語を使うこと」を信条とし、ネイティブスピーカーのように流暢に話すことよりも、ゆっくりと正確で丁寧に話すことを重視しており<sup>1</sup>、英語で話す時には「日本にいるときより、温厚で重厚な人物だと思われている」と感じているが、同時に英語でもしばしばジョークを言うことに努めている。つまり、Aによると、Aの英語でのキャラクターは、『温厚かつ重厚でユーモアのある紳士』キャラとでも呼べるだろう。これに対して、日

<sup>1</sup> Aのこのような英語学習の基本的姿勢とポリシーは、「ノンネイティブスピーカー志向の英語学習モデル」と考えることができ、このことについては、これについては後述する。

本語でのAの人物像は、それとは異なると、周囲から指摘されたことがある。

A: 英語圏の大学にいるときに、オフィスから自宅の妻に電話しているのを聞いたR教授という人が、普段はゆっくりと話すのに、日本語ではこんなふうに早口で話す人だったのか、と驚いていました。

R教授が感じた日英間の変化は、発話速度の変化によるものであるが、Aは、その変化がある程度意図的で、速さだけでなく、ピッチや声質にもみられると、自覚している。

A: 速さが変わって、声の高さや質も変わると思います。高さは低めになって、落ち着いた声になると思います。ブッシュ大統領、パパブッシュの方が、声が高いので、ボイストレーニングを受けて、声を低くしたとどこかで読みました。高い声の男性は指導者として信頼されないからだとのことでした。私はつい高い声が高くなるので、低めに話さなければならぬと気づいて低くすることもしばしばあります。【中略】(英語では) 落ち着いて思慮深く厚みのある人格を示そうとするので、そういうふうを受け取られているかもしれません。

Aの英語に感じられる「温厚さ」「重厚さ」は、このようなAの英語での、低めの落ち着いた声でゆっくりと話される話し方により、意図的に表現されていると考えられる。

またAは、しばしば英語でジョークを言うが、そのジョークは内容も言い方も、日本語のものとは違っている。その際の感覚を、Aは次のように述べた。

A: それで、こういうジョークを言う時の私は、日本でジョークを言う時の私とはちょっとちがっていると思っています。普段の自分ではなく、英語でジョークを言う英語話者になっている…そういう感じです。もちろん、ジョークを言う前に、英語で話している私が普段の私とはちがっているのだから、当然なのかもしれませんが。

Aは、この「普段の自分ではない」「普段の自分とは違う」という感覚によって、話し方だけでなく、話す内容(ジョーク)も変化する。Aはその自分の変化を以下のように言語化した。

A: これは日本語では、普段の状態と連続性を持っているために簡単ではありま

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

せんが、英語でなら、ある意味で多少は別人格になるので、これは意図してやっていると思いますし、やっているうちに、私の英語での話し方の声は、日本語の時とは多少ちがってきているかもしれません。

ここでAの述べる「別人格」とは、もちろん完全な別人格ではなく、あくまでもとの人格と連続性を保ちつつも、その連続性が弱められ、別人格のようにも感じられる感覚で、バイリンガルが多言語間で感じるもの (Ervin-Tripp, 1964, Pavlenko, 2006, Koven, 2007 など) に近いと考えられる。

さらにAは、英語で話す際の感受性の変化の事例として、英国で行った講演の前日の体験を語った。Aはこの時、思い入れのある英国の土地で、翌日の講演に備えて、一人でその講演のことを考えていた。

A: 小学生だった私は、その(その場所を舞台とした本の)シリーズの登場人物に憧れていました。将来自分もそのようになれたらと思ったものです。その自分が小学生の時に、そのシリーズの舞台であるこの場所で、自分が英語で講演する日が来るなど、夢にも思っていませんでした。しかし明日、それをすることです。それを考えていて、*Life is such a beautiful thing!* という言葉が口に出て来てそれを口で言ったとき、目に涙が溢れました。英語だと、こういうことがあります。きっと日本語だと、涙は出なかったと思います。このように、英語の世界の自分は、日本語の世界の自分とは、少し違うのかもしれない。自分が違っているというより、自分が違う世界に居る…。これは、中学生の時に、(英語の)歌を聴いて歌と一緒に歌っていたときから、すでにそうだったのかもしれない。

A: なにか別の世界の住人になっていて、日常的な人格とは「非連続性」があるのではないかと考えれば、たしかにそれは言えるかもしれないと思っています。これは不連続ではなく非連続です。連続しているが連続していない面もあるということです。私が連続性を持ったまま、別の人格も纏う…そんな感じでしょうか…英語はそれを可能にするのかもしれない…

このように、Aは、言語が変わることによって、自分が別の人格になるような変化を感じたと述べており、その感覚を、様々な例を挙げて、[自分の感受性のうちの別の部分が解放されるという感じ] [感受性のセットが別のセットに替わるという感じ] [なにかいろいろ邪魔なものなくなり、感情が解放されて純粋な気持ち

になったり、より感受性が豊かになったりする]と表現している。

Aの感じるこの変化は、「キャラクタ」の変化なのだろうか。定延(2011)の示す3区分によると、「状況に応じて変わる自己」のうち、変わらないものが「人格」、  
「本当は意図的に変えることができるが、変わらない、変えられないことになっているもの。それが変わっていることが露見すると、見られた方も、見た方もそれが何事であるかすぐにわかり、気まずい思いをするもの」が「キャラクタ」、自由に  
あからさまに変えられるものが「スタイル」とであるとされる。つまり、キャラクタ  
が変わるのは「気まずい」ことである。しかしAは、この変化を気まずく感じては  
いない。かといって、あからさまに相手によって「スタイル」を変えているわけ  
でもない。Aの英国での経験は、一人きりの状態でのものである。このことから、同  
一言語で話されている間のキャラクタの変化とは異なり、言語間でみられるキャラ  
クタの変化は、自己および他者にとってその「気まずさ」が減じられ(または無く  
なり)、容認されやすくなるといえるのではないだろうか。さらに、Aの語りから  
は、その変化が、自分自身で別人格になったような感覚さえもたらず、かなり「人  
格」に近い、「人格」と「キャラクタ」の間の境界の曖昧な領域における変化であ  
ることが示唆される。本研究ではAの変化をこのように捉え、「人格」に近い領域  
での「キャラクタ」の変化であると想定する。

## 5. 質問紙調査の結果

質問紙では、動画をみながら、日本語と英語で表される講演者の人物像を比較し  
て、10段階(0: そう感じない, 1: ごくわずかにそう感じる ~ 10: 非常に強くそ  
う感じる)の選択による回答を求めた。以下に回答の平均値を示す。

表2 日本語と英語で話すAに対して参加者が感じた人物像の平均値

	質問	英語	日本語
(1)	丁寧な感じがする	7.5	6.8
(2)	無礼な感じがする	1.5	2.5
(3)	温厚な感じがする	6.8	5.4
(4)	冷酷な感じがする	2.1	4.1
(5)	品がある感じがする	6.8	7.1
(6)	品がない感じがする	0.8	1.1
(7)	重厚な感じがする	5.8	7.8
(8)	軽々しい感じがする	3.1	1.4

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

(9)	ユーモラスな感じがする	7.6	4.1
(10)	堅物の感じがする	4.3	6.7
(11)	女性的な感じがする	3.4	2.7
(12)	男性的な感じがする	5.3	6.7
(13)	若い感じがする	5.8	3.6
(14)	老齡の感じがする	3.8	5.3

参加者 12 名に対する質問紙調査は、量的な検証を目的としたものではなく、フォーカスグループのための参加者のウォーミングアップのような目的で行った。結果として、有意差があるかどうかは検証できないが、ある程度の差異があった項目をみると、日本語より英語の方が「丁寧さ」「ユーモア」「若さ」が感じられており、「重厚さ」は英語よりも日本語での方が感じられていたといえる。

## 6. フォーカスグループの結果

普段の日本語でのAについて、教師と学生という関係性もあり、参加者は、恐怖感と畏怖の混在したような感情を持ったり、Aに威圧感を感じたりしている。Aはしばしば、大学院生から、所属する学部で研究に一番厳しい教員と評されることがあるという。

*P6* : あまりしゃべりかけられないですね。あとでメールしようとか思ったり。

*Y* : あの英語 (を話している時の) のA先生だったら、質問はしやすい？

*P6* : (笑) そうかもしれない。

*P1* : 先生、日本語でされるとき、まあ先生なので先生キャラなんですけど、校長先生のキャラとか、上司とか部長とか役員とか。そういう感じのキャラクタなんですよね。そういう雰囲気がすごく感じるんですけど。【中略】知らない人に知識を与えるみたい。英語の方がむしろなんかちょっと同じ目線感はあるかなみたいな。

また、日本語ではメッセージの強い訴えかけにより、説得性の高さが重視されていると感じた参加者も多かった。

*P6* : あの、日本語がすごく、あの、まあ、お上手って言うのもあるんですけど、わたしたちよりも、言語能力的にっていう意味で、それでもすごく、溢れ出て

きているんだろうなみたいなのが、すごく分かるというか、その講演聞いているだけで、言葉の端々にうわ〜とこうなんか.....くる感じがするんです。

P7: すごいメッセージを訴えかける感じが日本語の方が強い。

これに対して、英語で話すAからは、参加者は、より対話的でユーモラスな印象を受けている。

P10: はじめて先生のレクチャーを英語で聞いたときは、やっぱりちょっとびっくりしたんですよ。表情が違うな。それから。日本でお話しなさる時には先生のオーソリティというか、権威みたいなのをやっぱり、あると思いますし、先生はそれを意識的に誇示していらっしゃる。英語で、プレゼンテーションとか、文化的背景を知った上でなさっているの、そういう影響がないようになって、びっくりするような一面っていうのを私は感じたかもしれないです。

Y: 英語でのときは権威的な感じがなかったという?

P10: 違う形で、権威を伝えようと...してらっしゃったとは思いますが。なにか、こう、威圧感はなかったというか。日本語で、先生とお話しようとする、三歩ひいちゃう。外国で、別の環境で話していらっしゃる、もちろん立ちますけど、もうちょっと近づいて、話ができる雰囲気は、自分でもびっくりしましたね。感じたんですね、それ。

P1: 試しに、先生と英語で院生室で英語で話してみるとどうですかね。どうなるのかな。ハローみたいな感じで。失礼にあたるかもしれませんが。試しに日本語禁止で。

P2: その、A先生ってよく日本語で話すときは、こういう(前傾の)体勢をとる(笑)。英語で話してる時は少しこういう(リラックスした)体勢。若干、英語の方がフランクな印象。

P1: 英語の時はそんなに(先生キャラではない)。映像上の見た目で重厚感が伝わってくるかもしれないんですけど。言葉だけでみるとソフトな感じ。日本語の時に比べると少しソフトな感じはしました。

1名、英語の方が若く聞こえるという参加者もいた。

P7: 一つ思ったのは英語はすごい声が若く聞こえました。わたしはなんですけど、聞いててへっ?て思って、誰って思って、先生の声がすごく若く聞こえて、発

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

声の特徴なのか、声がすごく若いなと思いました。日本語の声がかすれたりするんですよね。で、日本語が年相応。英語だとかすれるところがない。う～ん、私は、その声だけが若くて、キャラとは思わなかったのですけど。

また、英語では相手の反応をより意識し、相手に合わせようとしているという印象も、多くの参加者が感じていた。

P8 : 英語で講演してる時、聞いている方々の反応をすごい見ながら話してる。日本語の場合はもう！(一同爆笑) <あ～、それは～>この二つが大きな違いですけど。 <あ～、なるほど>

P7 : 英語の方が、意識的にすり合わせようっていうか、相手に歩み寄ろうみたいな。ジョークとかが多くなるのも。そういう寄り添い。 <寄り添い...>英語で緊張するときは、ふつうは私が緊張するから、こうなんか強くみせようとしてやったりするんですけど。先生は自分をどうみせようっていうよりも、いかに相手に話が伝わりやすいようにするかみたいに、意識されているのかなという気がします。

P5 : 英語の場合は、ちょっと遠慮してる感じ。日本語の場合は、あまり遠慮はされてない。

P11 : その言葉を話す時は、相手の文化とかノリとかに合わせてっていうようなことかなと思うんですけど。なんかあの、ユーモラスな自己紹介が、時間とかの都合とかもあると思うんですけど、やっぱり聴衆によって、日本語の方はほとんどなかったんですけど、英語の方はちょっとユーモラスな自己紹介されてたので、そこはけっこう、なんか特徴的かなと思いましたけど。

なお、ジェスチャーについては、英語の方がジェスチャーが多いという参加者が多かったが、日英間で変化がないと感じた参加者もいた。同じ動画でも、見る人によってこのような違いが出ることは興味深い。

P12 : 英語だととたんに身振り手振りがくわ～つとでる人がいるんですけど、A先生の場合はもともと、日本語の時も使われる人で、英語の時もすごく増える訳ではなくてボディーランゲージも「あ～おんなじくらいだな～」というふうに思って聴いてたのと。



P8: 英語の場合はずねにボディランゲージ。日本語の場合はスライド読まない時だけ、ボディランゲージを使っている。ような感じ。〈そうですよね〜〉。

P3: 私も同じように、英語話してる時にほんとボディランゲージが増えているなと思いました。〈はい、はい〉。

このように、程度の差はあるが、日本語と英語の話し方に何らかの変化があることについては、ほぼ全員がそれを感じていた。

Y: なんか、はい、これまで出たものをまとめると、英語の方が内気な感じで少し若い感じにきこえて、威圧感がなくなっている感じでは大体皆さん同意と言うか、そんな感じするという風に思われますか？日本語の方は権威があって、それを権威にある人物で、少し威圧的で、言いたいことがいっぱいあってそれを伝えたいという思いが伝わってくる、という感じ。

しかし、その変化の程度については、筆者は大きく変わると感じていたが、フォーカスグループでは、筆者と同様に感じた参加者も、あまり変わらないと感じた参加者もあり、その捉え方は一定ではなかった。

P6: 私はなんか、あんまり変わらないような印象を受けたんですけど、敢えて言うとなると、英語をしゃべられる時の方が、ちょっと内気な感じが(笑)したんですよね

P7: (英語の方がリラックスしているが) 人格はそんなに変わらないなっていう印象。

「あまり変化がない」と感じた参加者は一様に、以下のように、英語でのAに、一般的に日本人が英語を話す時にみられるような「力み」のなさを感じていた。

P12: 思ったよりキャラ変わんないんだなと。あの、僕もなんですけど英語でしゃべろうと思ったら、テンションあげてくんですけど、というかあげないと話せないんですけど、まあA先生フラットな、そこに力入ってる感じじゃないなーというふうに思いました。

P6: それ多分私だと、私日本語得意じゃないし、英語もあまり得意じゃないんですけど、英語をしゃべろうと思うと、奮い立たせないとしゃべれないので、すごくあの、なんていう自信を持って「わたしは行けるわ」みたいな感じじゃないとしゃべれないので、なるので。A先生はその逆なんじゃないかなと。思っ

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

て。あの、とても英語の方も、内気な柔らかな感じがあつて。全体的な雰囲気はそんなに変わらないかなと。

また、この変化には会場の大きさが影響したのではないかという意見が出された。日本語での講演は190人収容の大きな講堂で行われているのに対し、英語での講演は比較的小さな部屋で行われているからである。しかし、その意見に対して、講演の場以外でのAをよく知る参加者から、相手との距離に関わらず「怖い」という意見が次々に述べられ、この変化は会場の大小の影響によるものではないという見解が出された。

P7: ただちょっと近い、聴衆が。そういうこともあるなと思ったので。

P12: 実際、大きさはぶん違いますよね、だいぶ、話してるところの。たぶん英語だと高くないし。日本語の話しているところは体育館みたいな大きい講堂にみえましたし。

P7: でもなんか、あれですよ。ワークショップで小さい部屋で、わりと相手が近くても、けっこう怖くないですか。

P8: 同じ話を、同じくらいの部屋の中で、日本人の院生たちも、同じ内容を日本語で話してる時、それを生で見てるので、その時、近くてもあんまり反応みない、日本語では。英語ではすごいこう、その場で、なんかその、さっきの動画じゃなくても、その場で私はそういう違いがあるな~と思って見てたんです。

## 7. 結論と考察

Aの日本語と英語の間のキャラクターの変化は、筆者が予想していたほど明白ではなく、人によってその捉え方が異なっていた。しかし、たとえ「敢えて言う」「思ったほど変わらない」といった微妙な変化であっても、全員が何らかの変化は感じていた。そしてそれは発話速度やピッチといった単なる話し方の変化だけではなく、その話し方から「威圧的」「内気そう」「ユーモラス」といった様々な異なる人物像が表現されており、その変化が聞き手に感じ取られていた。つまり、聞き手によってその程度が異なるものの、このAの日英間の変化は、Aの発話キャラクターの変化であると捉えることが、可能であろう。つまり、Aの発話キャラクターは、日本語と英語の間で、変化していることが明らかになったといえる。そしてAは、少なくともこのフォーカスグループの参加者にとって、日本語では説得性の高さを重視して聞き手に強く訴えかける『威厳のある熱い教育者』キャラであり、英語では了解

性の高さを重視して聞き手に寄り添う『親しみやすくユーモアのある対話者』キャラである。

なお、この英語のキャラクタは、A自身が意図的に表現しているという『温厚かつ重厚でユーモアのある紳士』キャラと、ある程度重なっているとえるだろう。「重厚さ」がフォーカスグループで話題に上らなかったのは、Aの英語での、日本語とは異なる「柔らかさ」に参加者の注意が向いており、日本語にも英語にもみられる「重厚さ」には意識が向けられなかったためであると考えられる。質問紙でも英語の重厚さの評価が日本語より低かったことは、このことが原因であろうと考えられる。このようにみていくと、Aは自らが意図するキャラクタの獲得に、ほぼ成功していると考えられることができるだろう。そのことも、Aの語りからだけでなく、フォーカスグループによって明らかにされたといえる。

## 8. 終わりに

本研究は、言語間で発話キャラクタの変化を示す一人の事例についての考察であり、他の類似した事例や、言語間でキャラクタが異なる事例についても、今後、同様な、あるいは異なる方法で、検討する必要があると考えている。また、本フォーカスグループは、身近な人物について、その人物を知る研究参加者が、その人についての否定的な事柄も含めて議論するという、研究倫理の観点からみて、本来であればなかなか実施困難なものであったが、今回は諸条件が重なり、その機会を捉えることで実現した。

調査実施前は、「先生」であるAに対して研究参加者が忌憚のない意見を言えるかという懸念があった。また、研究参加者同士が知り合いで、お互いに匿名性が保持され得ない条件の中で、どこまで本音を語れるのかという疑問もあった。しかしながら結果的には、議論は、Aへの否定的な発言も含め、活発に行われた。たとえば、日本語でのAが威圧的であるといった否定的な意見についても、特に躊躇することなく発言がなされ、次々と発言が続き、相乗効果で議論が深まっていく様子が観察された。これは、Aとフォーカスグループ参加者の間の十分なラポールと、Aの人柄に対してかれらが保持している信頼によってもたらされたものであると考えられる。Aによれば、AのゼミではしばしばAに対する厳しい反論も自由に展開され、だからこそフォーカスグループをすることを提案したとのことであった。また今回のフォーカスグループでの議論の深まりは、その相乗効果だけでなく、参加者全員が何らかの形で質的研究に携わる者であり、研究倫理を理解し、議論があくまで研究の一環であると意識して発言したことにもよるかもしれない。そのようにして、参加者それぞれから出された多様な見解から、議論を通して、最終的には、A

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

の日本語と英語の間の発話キャラクターの変化について、明らかにすることができたと考えている。

なお、Aの話す英語には、一般的な日本人にしばしばみられるような、不自然な力みがなく、自然体であり、それが、一部の参加者に「あまり変わらない」印象を与えていたことがわかった。Aは、自らも意識しているように、ネイティブスピーカーのように英語を話そうとはしていない。Aの英語は、あくまで非ネイティブスピーカーの英語であり、それでいて自然である。この自然さは、Aの英語運用能力の高さだけでなく、言語に対するAの価値観、姿勢にもよるものであり、それは非ネイティブスピーカーモデルの英語学習と呼ぶべきと考えられる。これについては稿を改め、とくにAの語りを通して検討する予定である。

### 参考文献

- (1) 大谷尚 (2008) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』54(2), 27-44
- (2) 大谷尚 (2011) SCAT: Steps for Coding and Theorization：明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法『感性工学』10(3), 155-160
- (3) 加藤由香里 (2014) 授業観察システムを利用した授業検討会における FDer の役割『教育システム情報学会誌』31(1), 110-118
- (4) 金田純平 (2011) 要素に着目した役割語対照研究：「キャラ語尾」は通言語的なりうるか (金水敏 編) 『役割語研究の展開』27-47
- (5) 定延利之 (2011) 『日本語社会のぞきキャラくり：顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂
- (6) 中山亜紀子 (2016) 『「日本語を話す私」と自分らしさ：韓国人留学生のライフストーリー』ココ出版
- (7) 古屋憲章・金龍男・武一美 (2015) 日本語の教室をいかに描くか：初級「総合活動型クラス」における相互行為を質的に記述する (館岡洋子 編) 『日本語教育のための質的研究入門』ココ出版, 249-272
- (8) ホロウェイ, I. & ウィーラー, S. (1996/2000) 『ナースのための質的研究入門』 (野口美和子 訳) 医学書院
- (9) 南保輔 (2000) 『海外帰国子女のアイデンティティ：生活経験と通文化的形成』東信堂

- (10) モクタリ明子・キャンベルニック (2010) 人物像に応じた個人内音声バリエーション, 岡田浩樹・定延利之(編)『可能性としての文化情報リテラシー』ひつじ書房, 139-156
- (11) 山内薫 (2017) 生涯教育研究と質的研究法: 質的研究法を用いた日本語教育実践研究の事例から『日本生涯教育学会論集』38, 133-142
- (12) 山口治彦 (2011) 役割語のエコロジー: 他人キャラとコンテクストの関係 (金水敏 編)『役割語研究の展開』27-47
- (13) 山元淑乃 (2013) 日本語学習者の発話キャラクタに関する研究: 日本語学習者の語りの分析によるその獲得過程, 機能, 意義の探索『言語文化研究紀要』22, 57-73
- (14) 山元淑乃 (2017) アニメ視聴を契機とした日本語習得を通じた発話キャラクタの獲得過程に関する事例研究: フランス移民二世 C の語りの質的分析から『言語文化教育研究』15, 129-152
- (15) Campbell, N. & Mokhtari, P. (2003) Voice quality: the 4th prosodic dimension, In M. J. Solé, D. Recasens & J. Romero (Eds.), Proceedings of the 15th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS'03), Barcelona, Spain, 2417-2420
- (16) Ervin-Tripp, S. (1964, reprinted 1973) Language and TAT content in bilinguals. Language Acquisition and Communicative Choice. Essays by Susan M. Ervin-Tripp, Stanford, CA: Stanford University Press, 45-61
- (17) Pavlenko, A. (2006) "Bilingual Selves" Bilingual Minds: Emotional Experience, Expressions and Representation, Clevedon, Buffalo and Toronto: Multilingual Matters, 1-33
- (18) Koven, M. (2007) Selves in Two Languages: Bilinguals' verbal enactments of identity in French and Portuguese, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company

(琉球大学国際教育センター)

発話キャラクターは異なる言語間で変わりえるか  
日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から  
(山元)

The Change of “Verbal Character” of a Japanese English Learner A  
Qualitative analysis of the focus group

YAMAMOTO Yoshino

Keywords: verbal character, change of verbal character, focus group, SCAT, EFL

**abstract**

This paper is an exploratory research to show whether the “verbal characters” of a Japanese English learner A change when using Japanese and English and, if they change, to identify each character in each language, utilizing a focus group of twelve participants who know what A is normally like in Japanese. Qualitative analysis of the focus group shows that all participants detect a change in A’s verbal character although participants’ views of the depth of change vary. For most of the participants, A has the verbal character of a “dignified passionate educator” in Japanese, someone who speaks in a pleading tone, and the verbal character of a “friendly and humorous conversationalist” in English, someone who kindly cares about listeners. A’s verbal character in English, identified by the focus group, has a substantial overlap with the verbal character of “mild, imposing and humorous gentleman” in English, which is intentionally produced by A. This intentionality means A’s tactics bear fruit in expressing his verbal character, as planned.

(YAMAMOTO:University of the Ryukyus)